高校編⑳ 最新事情

学びの意欲を高め、学ぶ喜びを体感させる

岡山県立高梁高等学校

（岡山県高梁市）

備中松山城の尾根小屋跡にたたずむ岡山県立高梁（たかはし）高等学校は、創立から130年の歴史を誇る伝統校だ。1学年に家政科1クラス、普通科4クラス、約550名の生徒が学んでいる。「生徒たちは学科の垣根を越えて、お互いによい影響を与え合っている」という同校で、家政科の取り組みについて伺った。

「生活教養」の授業。この日はお茶出しの実習をした後，来客応対の一連の流れをロールプレイング

「生活教養」で社会人のマナーを先取りする

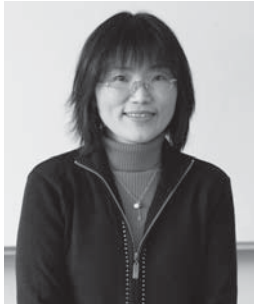
「それでは始めてください」。鐘ヶ江美樹先生の合図で4、5名ずつに分かれた各班が一斉に活動を始める。やかんで湯を沸かす、湯飲みを洗う、椅子や机を片付けるなど一人一人が仕事を見つけて動き、説明を受けたお茶の入れ方を確認する。岡山県立高梁高等学校家政科が、社会に通用する生徒を育てたいと4年前に学校設定科目として取り入れた、3年生の「生活教養」でのひとこまだ。

見せていただいた木曜日は、2時間連続授業の日。1時間目はお茶出しがテーマである。鐘ヶ江先生がお客さまにお茶を出す際の心構え、おいしい入れ方、美しい出し方、客として出されたときの頂き方などを説明し、実演した後は、生徒たちがそれぞれ役割を交代しながら練習を始める。調理実習室で実際にお湯を沸かして実習するのが家政科ならでは。お茶菓子として先生が和菓子を取り出すと歓声が起こった。調理実習で和菓子作りを指導してくれた方のお店のものだという。普段はあまり家でお茶を入れたりしない生徒も真剣な顔つきで湯飲みを温め、茶葉を計る。お盆の持ち方や置き方など、生徒同士がお互いにチェックし、教え合いながら進めていく様子が印象的だ。

次の2時間目は、オフィス内での接遇場面を想定して先ほどのお茶出しと、以前習った敬語や訪問、名刺交換を組み合わせ、受付応対の一連の流れのロールプレイングである。それぞれの動作を確認するだけでなく、流れに沿って自然にできるようにとの工夫であり、生徒たちは言葉遣いなどにも注意しながら、役を変えて何度もロールプレイングを繰り返していた。

「お茶出しもそうですが、やはり知らないことはできません。『生活教養』では1年間を通して、日常生活や実社会でのさまざまな場面で相手の立場になって考え、行動し、お互いに気持ち良く生活するために必要な礼儀・マナーを学び、身に付けることを目標としています」と鐘ヶ江先生は説明する。授業は大切にされてきたマナーの意味などを学んだ上で、実習を多く取り入れ、道具を使い動作を行って自然にできるようになるまで繰り返す。外部講師を招いてのビ

ジネスマナー講座や、茶道も取り入れている。「生徒にとって社会人のマナーは未知のことばかりですが、『こんな話し方、振る舞いをするのですよ』と説明すると『大人ってこうなんだ』と関心を持つようです。特に外部講師の授業は実際のビジネス社会のことが聞けるので、普段の授業と結び付けながらも、新鮮さ、緊張感を持った授業になります。社会に出る前に知っておくべきこととして学んでいますが、言葉遣いや立ち居振る舞いなどすぐに実践できることもあり、生徒たちは熱心に取り組んでいます」。


家政科主任の小川恵美先生

「生活教養」を担当する
鐘ヶ江美樹先生

秘書検定を受験した３年生。
後列左から佐藤瞳さん，小坂由紀さん，
前列左から竹竝奈々江さん，藤井愛さん。
藤井さんは家政科展の実行委員長を務める

竹井淳校長は自身も
高梁高校の出身

繰り返しの実習や検定取得で成功体験を積み重ねる

同校の家政科は1学年に1クラス。3年間、同じ40名の仲間と過ごすことになる。進路はほとんどの生徒が大学、短大、専門学校への進学で、栄養士や保育士、調理、介護など3年間の学びを通して進路を決めていく。

「家政科の生徒たちはとても素朴で明るい。こちらが言ったことが、すっと染み込んで行くような素直さもあります」と話すのは家政科主任の小川恵美先生だ。小川先生は家政科の目標について次のように説明する。

「私たちは、地域で愛され、学ぶ喜びと誇りの持てる学科を目指しています。そのために〝謙虚な心〟〝感謝の心〟〝挑戦する心〟を育て、〝確かな学力〟〝豊かな人間性〟〝優れた実行力〟を身に付けるのが大きな目標です」。

全授業の二分の一以上という実習や、さまざまな資格取得を通してそれらの資質を育成するが、普段から重視しているのはあいさつだ。

「本校では家政科、普通科を問わず生徒の間ではあいさつが浸透しています。先輩から後輩へと自然に伝わっている部分もあるようで、お客さまや外部講師からも素晴らしいという評価を頂いています。家政科では特に、授業の始まりと終わりには、先に言葉を言ってから頭を下げる、〝先言後礼〟のあいさつを徹底しています」と小川先生。丁寧なあいさつで気持ちを整え、切り替えを図るのである。3年間続けた成果はなかなかのもので、「どこに出ても恥ずかしくないあいさつができる」と先生方は胸を張る。

家政科目に関連する資格だけでなく、「生活教養」を選択した生徒には秘書検定の3・2級の取得も大きな目標だ。ベースになるのは授業で学んだ内容。指導に当たる鐘ヶ江先生は「秘書検定では、信頼され協調性を持って仕事をする上で必要なスキルをより具体的に学ぶことができます。それは私たちの日常生活にも大いに生かされる内容です」と話す。試験の前には過去問題を解き、解答は教員がすぐに答えを言わず、生徒が考えたその理由を発表させる。そうすることで自分なりの考えを持ち、間違った場合にはしっかり考え直すことができるからだ。

3・2級に合格した佐藤瞳さんは「マナーや応対、言葉遣いについて学ぶことができました。例えば『先生はおられますか』ではなく正しくは『先生はいらっしゃいますか』。入試の面接や将来仕事に就いても、授業で学んだ対人スキルが役に立ちそうです」、同じく竹竝（たけなみ）奈々江さんは「電話の取り次ぎの仕方や、上司の出張中にすべきことなどぴんと来ないものもあって難しかったです。また、日頃の言葉遣いと、場面や相手に合わせた言葉遣いがあることが分かっ

最新事情⑳……岡山県立高梁高等学校

たので、少しずつ実践しています」と話してくれた。医療機関での事務職を目指す小坂由紀さんは3級に合格。「授業や検定で受付応対やお茶出しの仕方が理解できました。今までは『やって』と言われても断っていたけれど、今度は家でもお茶を入れてみたい」と笑顔を見せる。

家政科展は地域と交流し達成感を得る貴重な機会

地域に向けて学習の成果を発表するのが、毎年1月に地元の商業施設で開催する〝家政科展〟だ。金曜・土曜の2日間で、和洋菓子を提供するカフェやテーマを決めて制作したドレスを披露するファッションショー、オペレッタや手話歌の披露、お菓子や手芸品を扱うバザーなどさまざまな展示、イベントを行うのである。受付や販売、案内も全て、各学年の実行委員が中心になり、4月から準備を始めて生徒たち主導でやり遂げる。「家政科が、タテヨコにつながる貴重な機会です。上級生は指導役として下級生に積極的に声を掛け、下級生は先輩を見て育ちます」と小川先生。

3年生の藤井愛さんは毎年実行委員として活躍し、今年は委員長も務める。秘書検定3級で学んだことを生かして、家政科展のためのマナー講座も担当。「家政科展はみんなで一つの目標に向かって頑張るイベント。私は、先生の意見と生徒の意見をつなぐ係という気持ちでやってきました。自分なりにうまく調整役ができたと思います」と自信をのぞかせる。

先生方から見て、家政科展をやり遂げた生徒たちの変化はどのようなものだろうか。

「学年が上がるごとに成長を感じます」と小川先生。「感謝の言葉を素直に言えるようになりますし、結果に至る過程を考え、動けるようになります。作業の手が空いたら片付けたり、お客さんに声を掛けたりあいさつしたり、できることを見つけて自主的に動けるようになる。それは、普段の学校生活でも表れてきます」。

鐘ヶ江先生も「家政科展は〝自分たちの学びを実践する場〟という自覚があるようです。学んだことをベースに成果を披露する集大成。試行錯誤を繰り返しながら生徒は前向きに取り組み、動作や言葉遣いに気を付けたり人前で堂々と振る舞う姿を見ると、自信が付いたのが分かります」と話す。

地域への浸透については、同校の竹井淳校長が「温かく受け入れていただいています」と太鼓判を押す。生徒たちがにこやかに応対してくれるのを毎年楽しみにしているお客さまも多いそうだ。「家政科では、実習を繰り返すことで確かな力を身に付けることができます。積み重ねで達成した成果が目に見えますから、より充実感があると言えるでしょう。家政科展はその最たるもの。進路が決まった3年生も最後の頑張りどころになっているようです」。

竹井校長は自身も高梁高校の出身だ。以前から、普通科と家政科の垣根はあまりなく、それぞれの特長を生かしお互いに刺激し合うという伝統があるそうだ。

「家庭科技術検定や秘書検定をはじめとするさまざまな資格は、実際にスキルを得られることと達成感を得ることができるのが大きな利点。達成感は自己肯定につながります。そのためには、与えられるものだけでなく自分で立てた目標を達成することも大切。それを繰り返すことで自信は確かなものになります。生徒たちには、自分がやってきたこと、さらには生まれ育った地や学んだ学校に自信と誇りを持ってほしいと願っています」。

毎年1月，駅前のショッピングセンターで2日間にわたって行う家政科展。手芸の体験コーナーやカフェ，ファッションショーやオペレッタ，手話歌など半年以上かけて準備したものを地域の人たちに披露する